

国際委員会 G8 及びICSU等分科会 ICSU 附置委員会対応小分科会  
(第 22 期・第1回)

議事要旨

- 1 日 時 平成 24 年9月12日(水)13:00～15:10
- 2 場 所 日本学術会議 5-C(1)会議室(5 階)
- 3 出席者 大西委員、春日委員、山形委員、竹内委員、花木委員、渡邊委員、田口委員、柴崎委員(8名)  
(加入学術団体委員長等)土居先生、氷見山先生、岩田先生、松本先生、佐々木先生、荻野先生、村山室長、Dr.Edmunds  
(事務局)飯島次長、佐藤参事官、中村参事官補佐、伊藤、清田

4 議 事

(1)小分科会の趣旨説明

春日委員が委員長に選任され、山形委員が副委員長に選任された。

委員長から、ICSUには分野横断的なプログラムや委員会があり、日本学術会議の中でもそれらに対応した分科会があるが、分科会同士が横に情報を共有できる場がなかったため、横断的プログラムに対応している分科会の先生方、情報学、環境学、地球惑星科学の委員長の先生方に集まっていたいただき、情報共有したい旨説明があった。

(2)ICSUの各組織の活動と課題紹介

事務局から、資料1～3に基づき、ICSUの概要について説明があった。

次にICSUの関係各組織について資料等に基づき出席者から説明があった。

(3)今後の予定、展望等の議論

災害対策プログラムに関して：

被災国の日本で様々な会議を開催しているが、そこに至るアイデア作りを日本がもっと主導すべきところ、欠けていると海外から残念がられている。世界中がアクションを取れるよう、日本がリーダーシップを取るべきであり、モニタリングをする仕組みやその共通の尺度作りが日本に求められている。北京にIRDRのIPO(International Program Office)、台湾にIRDRのICoE(International Centre of Excellence)があるが、プログラムオフィスの分室のようなものを日本にも作れないか、という話もあがっている。

タイの洪水対策について7,600億円のプロジェクトの公募があるが、そこに日本の技術を持っていく場合、評価方法や日本のやっていることがグローバルスタンダードなのか、といった観点から国際的フレームワーク作りが重要である。日本で国際的基準を作るにあたり、戦略として進めるための訓練、人材も足りていない。学術分野全体としてしっかり対応していくことが大事である。

都市対策などで、標準化アイテムとして用いられるperformance indicatorの主導権を取ることが重要な事例も見受けられ、またWell-Beingも大きな鍵となる。一省庁内に留めず、組織を超え連携した活動が求められる。またIUGSからの、自然災害の国際研究連絡組織開設依頼につき検討中だが、日本から組織ができれば価値がある。

WDS-IPOに関して:

災害関係のIRDRで事務所(分署)を誘致し、日本にも設立したい話があるそうだが、WDS-IPOの場合、財政的負担もかなり大きく、相当の時間や労力がかかったので、誰がそれを負うか戦略的な考え方が重要。国際協力を円滑にやるには、フレキシブルにやっていかないといけないのではないかと。

IYGU(国際地球理解年)に関して:

IGUが数年前から運動を始めていてここ1-2年急速に現実味を帯び、ICSUもサポートをすることを決めている。グランドチャレンジズのボトムアップの対応とでも言うべきもの。トップダウンだけではなく、人々のモデルライフから変えないといけないというコンセプトで、例えばフードプログラム、食料問題と言わずにイーティングの問題であるとわかりやすく表現するという形のフレームワークができてきている。日本でも今から対応することを念頭に置いた方がいいのではないかと。ユニオンからアイデアを出してICSUがサポートし国連のお墨付きを得るというプロセスもある。日本も積極的にやっていく体制が必要であり、アカデミーから新しいものを発信していくことが大事だと思う。

CODATAに関しては、これまで上限1000万円の助成金プログラムに提案し、何回か獲得した経緯がある。国際的なお墨付きのあるプロジェクトを走らせることができるので、日本から発信して国際的なアプルーバルを得ることが大事。

Future Earthに関して:

既存の横断的研究フレームワークであるDIVERSITAS、WCRP、IGBP、IHDPの統一性や統合性も念頭において、社会科学分野も交えつつ、人類の共通課題として、社会活動を含む地球システムの持続可能性を検討していくという研究フレームワーク“trans-disciplinary action”へという意味あいもある。日本側の拠点として、京都の人間文化研究機構総合地球環境学研究所を検討してはとの発言があった。

なお11/21~23にはICSUのRegional Office(クアラルンプール)にて、フューチャーアースに対するアジア太平洋地区としての考えをまとめる会合が予定されているが、各分野が連携しつつ当地区における日本のプレゼンスを示す必要がある旨、各発言があった。

#### (4) 今後の開催

各委員からの議論後、春日委員長からは、今までこのような横の連携がなかったが、これを機会に、ICSU附置委員会对応小分科会と連絡協議会というような形を設置して、できるだけ定期的に開いていきたい、との提案があり、了承された。